

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520399

研究課題名(和文) 象形文字ルウィ語碑文の言語変異の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on Linguistic Variations of Hieroglyphic Luwian Inscriptions

研究代表者

大城 光正 (OSHIRO TERUMASA)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：40122379

研究成果の概要(和文)：象形文字ルウィ語碑文の言語変異を再帰小辞-si、疑問構文、字体と誤謬傾向、カルケミシュ碑文の文頭/文末表記の象形文字-a-と r 転化表記の通時的考察から、同言語の内的変化と地域的な特異性が明らかになった。また、同言語の印欧アナトリア語派に占める言語的位置もルウィ諸語の一言語として比較言語学的に重要な言語的特徴を保持していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：It is clear that Hieroglyphic Luwian has its own internal and regional linguistic features from the diachronic viewpoints of such elements as reflexive -si, interrogative sentences, scribal-errors, rhotacistic -t- and the initial-a-final in Carchemish to elucidate various linguistic variations of Hieroglyphic Luwian inscriptions. And therefore it is also noted that Hieroglyphic Luwian is important as one language of Luwic branch for IE-Anatolian comparative linguistics.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、象形文字ルウィ語、比較言語学

1. 研究開始当初の背景

(1)象形文字ルウィ語碑文は従来、完全に解読された言語と認知されない場合があった。その主な理由は石碑に彫られた象形文字の文字音価が学者間で微妙に相違していたからである。しかし当時のロンドン大学 J. D. Hawkins 教授による象形文字の詳細な音価同定の考察によってほぼ同定されるに至った。しかしながら同音価による象形文字ルウィ語碑文の判読と同言語の詳細な研究は

その後の同教授によって公刊された Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions (2000) を待たねばならなかった。同資料は 2000 年までに発見された全ての象形文字ルウィ語碑文を網羅しており、それ以後同資料は同言語研究の基本的研究資料としての位置を占めるに至った。同資料は地域的な碑文出土による分類で翻字、翻訳、注釈が記されているが、彼の主な関心は碑文内容と各地域ごとの歴史的な背景にあり、通時的な言語的変遷と

地域的に特異な言語的特徴の収集とその解明、言語接触の可能性などの歴史比較言語学的な観点からの考察の欠落と、地域的な言語変異を共時的な観点から考察する視点の曖昧さが指摘される。印欧アナトリア語派の中で、ルウィ諸語の一言語に含まれる象形文字ルウィ語もヒッタイト王国時代から同王国の滅亡後も含めた長期の言語資料を残している言語であり、同言語の歴史的考察と地域的な言語変異の考察は切り離すことのできない研究上の重要点である。このような立場から、彼の資料集の出土別碑文の言語的特徴の抽出と分析、地域別の碑文間の共通的特徴の抽出とその来源、周囲の言語との接触の有無などを精査することによって、象形文字ルウィ語の歴史的、地域的な言語の様相が究明されるのであり、同究明によって他のルウィ諸語との歴史的、系統的な関係、更には印欧アナトリア語派内の内的関係の解明に重要な証拠を提供するものと期待される。

2. 研究の目的

(1) 古代オリエントにおいて、エジプト象形文字(聖刻文字)とは来源を異にする同地域独特の象形文字が創造されている。この起源については諸説あるが、ヒッタイト王国建国(紀元前 17 世紀)以前にさかのぼる時代に作成された印章の在証から、その周辺地域の象形文字創案の刺激を受けてアナトリア固有の象形文字として出現した蓋然性が非常に高い。この文字体系はその後ヒッタイト王国内のルウィ系民族において広まり、同文字はこの民族固有の文字体系として独自に改変されて発達することになった。同民族はヒッタイト王国滅亡後に、北シリアや南東アナトリア地域にいくつもの小都市国家を建設して、同地域に多くの国王の石碑文を残すに至った。2000 年に当時のロンドン大学の J. D. Hawkins 教授が同碑文の翻字・翻訳・注釈を記した碑文集を出版して、その後の同言語の碑文研究の基本的な資料となっている。これによって、印欧語族のアナトリア語派(ヒッタイト語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、パラ語、リュキア語、ミリア語、リュディア語)に属する一言語である象形文字ルウィ語のより綿密な考証が可能になったが、同書は文献学的手法によるテキスト刊行といえるものであり、詳細な比較言語学的な考察を行うためには、印欧アナトリア諸言語のそれぞれの比較言語学的なデータとの精密な比較分析が必至である。特に象形文字ルウィ語は同語派の中の、ルウィ諸語(他に楔形文字ルウィ語、リュキア語、ミリア語を含む)に属する言語としてこれらの言語間の詳細な比較考察も不可欠である。そのためには、象形文字ルウィ語碑文の成立年代とその言語特徴の抽出、碑文の出土地による

地域的な言語変異に関する考察が重要であるが、同考察は現在のところほとんど皆無の状況といえる。筆者は印欧アナトリア諸言語の比較言語学的なアプローチによって、象形文字ルウィ語の同語派内の言語的位置の解明、同言語の成立に関する他の印欧アナトリア諸言語との言語干渉、象形文字ルウィ語の未解明の言語的特徴の同定を考察してきた。そこで、今後の同言語に関する言語的な問題点は、碑文の成立過程を考慮した出土地の地域的な言語変異の正確な把握とその言語分布によって象形文字ルウィ語の包括的な言語の全体像が明証される。

(2) 従来、「ヒッタイト象形文字」と呼称されていた同象形文字は、古代アナトリアのルウィ系民族固有の文字として認知され、ヒッタイト王室内で王・王妃の印章の飾り文字、ウラルトゥ象形文字への伝播も加えて、現在では「アナトリア象形文字」という呼称がより正確なものと言える。同文字研究ではこのような伝播経路の実体も理解したうえで、象形文字の成立過程と出土地、特に文字記号と語形音価の同定、同語形の使用上の書記の表記法と誤謬傾向の把握のもとで、なお未解明の語形として残された語彙の再建を試みる。更に各碑文を出土地別に分類してそれぞれの碑文成立と地域間の言語的な異同を明らかにする。これによって、従来、象形文字ルウィ語の碑文の成立年代と出土地を考慮した碑文の詳細な言語分析が可能になり、同分析が実施されていない空白部分に新たな光を当てることが出来る。それによって、より詳細な印欧アナトリア諸言語内の象形文字ルウィ語の更に詳しい言語の実体に新たな知見を加えることが期待できる。

(3) 本研究代表者は、1996 年以来、「西アジア言語研究会」を京都産業大学において主宰し、現在まで 14 回を数えている。同研究会の主要なメンバーには、印欧比較言語学・ヒッタイト語学専門の吉田和彦(京都大教授)とセム語学専門の池田潤(筑波大教授)を含め、印欧アナトリア諸語、セム言語学、シュメール語学、古代エジプト語学等の西アジア諸言語の専門家 20 人ほどの研究者が参加し、各研究者の研究成果の評価や研究レビュー等、毎回活発な議論を行っており、これらの学問領域において我が国の研究を推進してきたと言える。特に、筆者は京都大学吉田教授の印欧アナトリア諸語の比較言語学的な研究成果は象形文字ルウィ語研究にとっても無視できない貴重な研究成果と評価しており、今後とも同教授の本研究への助言をいただく。また、最近、国際的にみても、象形文字ルウィ語に関する研究概説書がドイツやオランダなどのヨーロッパ(A. Payne,

Hieroglyphic Luwian (2004); R.Plöchl, Einführung ins Hieroglyphen-Luwische (2003); H.C.Melchert, The Luwians (2003))で出版されているが、本研究の趣旨を含めた包括的で言語実体を詳細に分析した研究概説書といえるものは残念ながら存在しないのが現状である。古代語研究が近代言語学の特に出発点となる比較言語学の厳密な方法論に基づいて大きな成果を上げることになったのは、古代語の通時的な視点に立った比較方法であると同時に、同視点に立脚した共時的な言語資料の精査に基づいて初めて有効になったのである。それ故、象形文字ルウィ語の包括的な実証研究は通時的な研究成果と共時的な研究成果の共有の視点に立った手法が必至である。その意味でも、同言語の各碑文の成立年代の同定と言語傾向、出土地間の言語接触の可能性などの地域的な言語伝播を考慮した考察が必要となる。それゆえ、筆者も引き続き主宰する「西アジア言語研究会」に於いて、上記の視点に立った研究の方向性や中間成果に関して吉田(京都大)、池田(筑波大)両教授と意見交換の場を持つことも含めて、本研究課題は国際的にも注目されるものと確信している。最終的には、従来成立年代や出土地を考慮した碑文の言語分析が実施されていない空白部分に新たな光を当てることができ、象形文字ルウィ語を記述した古代アナトリア固有の象形文字の成立と、同文字を創案したルウィ系民族の言語であるルウィ語が従来の楔形文字ルウィ語やリュキア語に加えて、より詳細な印欧アナトリア諸言語内の象形文字ルウィ語の実態に新たな知見を加えることが期待できる。

3. 研究の方法

(1) 象形文字ルウィ語の碑文資料を出土地別に分類する。同碑文の分類では、国際的に高い評価を受けている J.D.Hawkins の Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions (2000) を使用する。出土地別としては、全体を 10 地域に分類する: Cilicia, Carchemish, Tell Ahmar, Maras, Malatya, Commagene, Amuq, Aleppo, Hama, Tabal。これらに分類された碑文の中から、比較言語学的に有効な主要碑文を選定して、同碑文に散見される同地域に共通の言語的特徴、いわば、古代アナトリア地域における地域方言的な言語的特徴を抽出して、地域的な言語変異の存在を確認する。更に、それらの言語的な変異が地域特有の言語接触、言語借入、内部革新等の明確な根拠を検討して、正確な同表現形式の来源を明らかにする。この分析には、印欧比較言語学、及び印欧アナトリア比較言語学の研究者の成果も勘案しながら精密な分析を行う。

(2) 具体的な研究方法として、動詞の末尾に

直接接置される-si 要素が散見される。筆者は同要素を印欧アナトリア諸言語の一言語であるパラ語の再帰小辞-si に対応する象形文字ルウィ語の特異な再帰小辞形と推察したが、研究者の中には、特にマルブルク大学の E.Rieken のように、同要素を動詞の人称語尾の一部と見做す説もあるが、最近新たに発見された象形文字ルウィ語碑文の-si の在証によって、従来以上に-si 要素の使用が一部の地域的な言語的特徴として措定されることが推知されているので、碑文の地域的な言語変異との観点から正確な考察を加えたい。

(3) 上記の-si 要素の観察からも推察されるように、個々の碑文に特有の言語的特徴の抽出は象形文字ルウィ語の共時的、通時的な考察には必至であり、いかなる微細で特異な言語的特徴でも地域的な言語変異として把握できるように、上掲の 10 地域に分類したそれぞれの碑文のデータベース化にも着手する必要がある、同構築に向けての確認作業も進めると同時に、データベース化に必要な碑文間の地域別の言語特徴(意味不明の語形再建も含めて)の分析と碑文言語の地域的な変異に散見される来源(言語接触、借入、単なる書記の表記ミス・文法的な誤謬等)を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 象形文字ルウィ語碑文の網羅的、且つ根本的な言語の解明のために、上掲の J.D.Hawkins による Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions (2000) の地域別の碑文分類に基づく碑文言語の通時的な分析を行い、碑文別の書記の誤謬傾向としては、Cilicia 地方の Karatepe 碑文が突出(ほぼ半数)し、次に Carchemish 碑文(約 20%)の傾向が指摘できる。その原因としては書記自身の書字能力の問題と言えられるかもしれないが、特に Karatepe 碑文はセム系のフェニキア語との併記碑文であることから書記の出自と二言語書字能力の反映(Amarna 出土のエジプト人書記作成のヒッタイト語書簡文書の表記上の誤謬と同様)と首肯される。さらに職業書記ではなく Carchemish 商人作成のアッシュール書簡(戦利品として東方のアッシュールに持ち出し)に散見される誤謬も同様の誤謬傾向と考えられる。また、碑文の象形文字の字形分類では、草書体碑文と記念碑体碑文に散見される別種の字体や特異な字体の使用(つまり、草書体碑文に散見される記念碑体、逆に記念碑体碑文に散見される草書体、及び特異字体)の抽出分析でも、上記の Karatepe 碑文と Carchemish 碑文に、複雑な動物象形の ma (牡羊の頭の象形)、ta (ロバの象形)、u (牡牛の象形)などにヒッタイト象形

文字の破格傾向が指摘される。それ故、両碑文における地域特有の通時的な言語変化や文字表記上の改新、両地域間の言語接触等の可能性も含めた詳細な考察が必至である。同考察成果は筆者主宰の「第15回西アジア言語研究会」(平成20年12月6日京産大開催)において報告すると同時に、「研究成果報告書」(私家版,2011 予定)に収録される。

(2) 上記の J.D.Hawkins による Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions の中でも、特に同一地域内の碑文の成立年代別の比較考察が可能なカルケミシュ碑文の通時的考察を行った。語頭表記されるべき文字 a-が書記の表記ミスのように語末表記される奇妙な表記法(initial-a-final)がカルケミシュの Suhi 王家時代(BC. 11/10C~870)までは頻繁に出現しているが、それより後代の Astiru 王家時代以降(BC. 840~717)は全く表出されず、逆に r 転化表記(rhotacism)は Suhi 王家時代までは表出されず、後代の Astiru 王家以降に頻繁に出現している。それ故、両言語的特徴の共存は同言語の通時的な変遷においては存在しなかったという新しい知見を得た。Suhi 王家と Astiru 王家の過渡期の治世は Sangara 王の統治時代(BC. 870~840)にあたり、同王が積極的に周辺諸国と同盟関係を結んで広範な外交政策を実施したことから、周辺地域の言語的な相互影響が強く、その後のカルケミシュ地域の象形文字ルウィ語に影響を与えたものである。現在、ヒッタイト語の言語的変遷を古期・中期・後期の3時代に区分して歴史言語学的な考察が行われていると同様に、カルケミシュ地域の象形文字ルウィ語の言語的変遷を Sangara 王の治世の前後で2区分するための有力な言語的在証として理解される。同考察成果は筆者主宰の「第16回西アジア言語研究会」(平成21年12月6日京産大開催)において報告すると同時に、Sangara 王による時代区分の可能性についての詳細は「研究成果報告書」(私家版,2011 予定)に収録される。

(3) J.D.Hawkins の Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions は同言語研究にとって最も重要な研究資料であるが、刊行後に発見された碑文資料との比較研究も同言語の網羅的な考察に必至である。カルケミシュ地域から出土した碑文に散見された再帰小辞-si は同地域の特異な言語的改新の蓋然性が高いものであるが、同書の出版後に公刊されたものとして、1997年に発見され2000年公刊のチネケイ碑文(2例)、1999年に発見され2006年に公表されたテル・アフマル碑文(2例)からも-si 要素が確認され、同要素が書記による本来の再帰小辞-ti の-si 表記への誤謬という可能性はなくなり、同要素もより

広範な地域への普及を推知させる、筆者の主張である再帰性を明示する小辞と同定される。上述の研究成果は筆者主宰の「第17回西アジア言語研究会」(平成22年12月4日京産大開催)において報告すると同時に、ポーランドの研究雑誌にも掲載された。

(4) 上記のように、象形文字ルウィ語碑文の言語変異を字体と誤謬傾向、再帰小辞-si、カルケミシュ碑文の文頭/文末表記の象形文字-a-と r 転化表記の通時的考察から、同言語の内的変化と地域的な特異性が明らかになったが、更に象形文字ルウィ語には多くの用例はないものの、同言語碑文の詳細な解釈のためには十分な理解が必要な疑問構文についての考察を行った。同言語資料には疑問構文と計18例あるが、その中で真偽疑問文が9例、疑問詞疑問文が9例確認された。この用例数は多くないが、その理由は、疑問文が相手側に何らかの情報を問い合わせる表現形式であるのに対して、象形文字ルウィ語の碑文は大半が国王や高官による記念碑文の体裁であるので、問い合わせ形式の表出が非常に限られているからである。それ故、アッシュール書簡文書のような相手側への感情的な不満の気持を含意する修辭疑問文が散見されるのも理解される。アッシュール書簡文書の発見地が西方のアッシュールであっても本来の書簡作成地はカルケミシュと推定されているので、先述のように、カルケミシュの言語変異としての言語的改新の重要性と同資料碑文の地域別且つ成立年代別の比較考察が重要なことでは一致している。同研究成果は西日本言語学会誌に掲載されている。

(5) さらに、象形文字ルウィ語の印欧アナトリア語派に占める言語的位置も、同言語がルウィ諸語の一言語として比較言語学研究に重要な位置を占めていることが明らかになった。象形文字ルウィ語で解釈できるアナトリア高原西方のカラベル碑文の分析から同民族の早期のアナトリア地域への進出の確証、リュキア語のルウィ諸語グループへの帰属とリュキア語特有の言語的改新、楔形文字ルウィ語資料に散見されるトロイ地域との言語接触の可能性、完全解読に至っていないカリア語のルウィ諸語グループへの帰属の可能性が印欧アナトリア比較言語学による考察から徐々に明らかになってきたと同時になおいくつかの解明されなければならない問題点も浮かび上がってきた。同考察と研究の現状については西日本言語学会誌に掲載されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①大城光正、象形文字ルウィ語の疑問文について、西日本言語学会誌『ニダバ』、査読有、40号、2011、pp.112-118、
- ②Oshiro Terumasa、The Hieroglyphic Luwian -si Again、Lingua Posnaniensis、査読有、Vol. 52、2010、pp.67-70、
- ③大城光正、印欧アナトリア諸語の研究の現状と課題—ルウィ諸語を中心に—、西日本言語学会誌『ニダバ』、査読有、39号、2010、pp.165-173.

〔学会発表〕(計4件)

- ①大城光正、象形文字ルウィ語の疑問文、第17回西アジア言語研究会、2010年12月4日、京都産業大学、
- ②大城光正、カルケミシュの象形文字ルウィ語碑文にみられる言語的変遷、第16回西アジア言語研究会、2009年12月6日、京都産業大学、
- ③大城光正、印欧アナトリア諸語の研究の現状と課題—ルウィ諸語を中心に—、第39回西日本言語学会、2009年9月26日、京都産業大学、
- ④大城光正、西アジア言語研究の現状—総括—、第15回西アジア言語研究会、2008年12月6日、京都産業大学、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大城 光正 (OSHIRO TERUMASA)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：40122379